



リザさん(中央)は定期的に孤児院も訪問。子どもたちとも“友達”に。

みんな友達 ——カンボジアの親切さんに実行章を贈呈——

カンボジアから、「親切な女性に『小さな親切』実行章を贈りたい」と推薦メールが届きました。送り主は、「小さな親切」運動特任推進委員の長谷川清一さん(沖縄県・70歳)。5年ほど前から王立プノンペン大学の間々田和彦客員講師と一緒に、カンボジアで教育支援、障がい者支援の活動を続けています。

PPCIL(プノンペン自立生活センター)の支援活動で長谷川さんが出会ったのが、ソク・チャンリザさん(41歳・愛称リザさん)。同センターは、家の外に出たくても出られない障がいをもつ人たちの社会参加を目指し、自立生活のための訓練や授産事業を行っています。同センターの代表は、日本で研修を受けたサミスさんで、十数名のスタッフの多くが障がいをもっています。残念なことに、カンボジアでは障がいをもつ人への差別や偏見が強く、サポートをしようという気持ちを持つ人も少ないのが現状。障がいをもつ人は、家族以外の健常者に接する機会がほとんどありません。

その中であって、リザさんは支援者であると同時に友達として、一緒に買い物に行ったり、レストラ

ンで食事やカラオケを楽しんだりしています。味わったことのない日常生活は、みんなの生きる喜びに。

実行章贈呈式は、同センターから10名ほどの皆さんが参加。リザさんのご主人もお祝いに駆けつけ、中華系レストランで行われました。リザさんの名前が記載された日本語の賞状を贈呈すると、大きな拍手が沸き起こりました。

「ただ友達として遊んでいるだけなのに、こんなに立派な賞を日本からもらえて光栄です」と語るリザさん。心に壁をつくらないのは、“友達”という意識にあるようです。

次回カンボジアに来たときはぜひ我が家へと、リザさんのご主人に招待を受けた長谷川さん。新たな出会いを通じて、長谷川さんのカンボジア支援活動も広がりそうです。



賞状を手にするリザさんと推薦者の長谷川さん(左)